

文 献 抄 録

乳房切断術を受けた患者に対する理学療法の効果について

この研究は、乳房切断術を行い術後の理学療法を受けた患者グループと、術後の理学療法を受けていない患者グループとの間に、差があるかどうかを結論するために行われたものである。その内容は、1) 乳房切断術後に理学療法を受けたグループが、理学療法を受けなかったグループに比べ、肩の動きや機能的動作のレベルが改善するかどうか、2) 理学療法が入院期間を延長させたり、術後の合併症を増加させるかどうか、3) 利き手と手術側との影響についてである。対象は、乳房切断術後に理学療法を受けた49人の患者グループ(PTグループ 平均年齢56.4歳)と、理学療法を受けていない41人の患者グループ(Non PTグループ、平均年齢58.2歳)である。術前および術後5日、術後3カ月の情報を、それぞれ患者の角度計による肩関節可動域の測定(外転、屈曲、外旋)、上肢の周径の測定、手術側上肢による動作評価10項目の結果から得て比較をした。肩関節可動域では、短期(術後5日)のフォローアップでPTグループがNon PTグループよりROMの回復は大で、グ

ループ間に統計学的な有意差が示された。手術側による比較では、利き手に手術が行われた患者が非利き手に行われた患者に比べROMの回復が大で、これらの間に統計学的に有意な差が示された。長期(術後3カ月)のフォローアップでも、Non PTグループがPTグループに比べ有意に少ない可動域であった。動作評価10項目を見ると、治療を受けなかった患者は治療を受けた患者より動作遂行上で困難が多くみられ、5日後のフォローアップで5項目、3カ月後のフォローアップでは4項目にグループ間の統計学的な有意差が認められた。これらの結果から、術後PTを受けた患者が、受けなかった患者よりもよい機能的結果が達成できることが示唆されている。

Wingate L: Efficacy of Physical Therapy for Patients Who Have Undergone Mastectomies. *Physical Therapy* 65(6): 896-900, 1985

(自治医科大学附属病院 理学療法士

菊地 俊夫)

脊髄損傷患者における手根管症候群

手根管症候群(CTS)に関する研究はよくなされているが、脊髄損傷患者におけるCTSの研究はほとんど見られない。本研究では、脊髄損傷患者のCTS発症について尺骨神経障害との関係も含めて調査した。

症例は47名、性別は全員男性、年齢は20~73歳(平均47.8歳)、脊髄損傷からの発症期間は3カ月~42年、損傷レベルはD₂(残存)以下の者(合計91手)である。そして、彼ら全員は全体にわたるリハビリテーションプログラムを受けADLは独立している者である。

彼らに対する評価は、病歴と感覚テスト・運動機能テストを実施した。また、正中神経・尺骨神経に対し電気生理学的検査を標準の方法で実施し、この時、CTSの判定は潜時と振幅にて行った。潜時については運動神経は4.4 msec以上、感覚神経は3.4 msec以上でCTSとした。

結果は、30名の患者(47手)63%についてはCTS症状と電気生理学的検査の異常が一致していた。そして、この内21名の患者(34手)44.7%は尺骨神経炎も

合併していた。

CTSだけの者は9名、そして、尺骨神経の異常だけの者はわずかに2名であった。

脊髄損傷の受傷後経過期間とCTS発症頻度の関係は、受傷後1~10年で27%、11~20年は54%、21~30年も54%、そして、31年以上は91%と非常に増大し、脊髄損傷受傷後からの年数がたつにつれてCTSの発症率は高くなっていた。

我々は脊髄損傷患者が障害を補うため、車椅子推進時やトランスファーの際、彼らの手を過度に使うことがCTSになる因子と考える。

本研究結果をまとめると、脊髄損傷患者がCTSや尺骨神経炎に発展した割合は63%と明らかに多くの者に発症していることが分かった。

Aljure J, et al: Carpal Tunnel Syndrome in Paraplegic Patients. *Paraplegia* 23: 182-186, 1985

(兵庫県リハビリテーションセンター

理学療法士 堅田 裕次)

文 献 抄 録

成人女性における南カリフォルニア 図-地知覚テストの結果

これまで脳損傷を伴う患者に対して、いくつかの図-地知覚テストが用いられているが、これらの検査が図地障害を、十分に測定しているかの信頼性に欠けていた。この研究では、南カリフォルニア図-地知覚テスト(FGP)を用いて成人女性に対して評価を行い、このテストの信頼性の推定を試みている。

対象は18~81歳(平均34.85歳, SD=13.46)の124人の女性である。平均教育レベルは短大卒業程度であり、社会的経済的状態はTwo-Factor Index Social Postureでは11~77の範囲にあった。テスト-再テストの信頼性をみるために、すべての被験者に対してFGPテストを行い、4~6週間後再テストを行った。テスト結果は2つの方法で得られた。一つはすべてのテスト項目に対する正答数(Total), もう一つは5個の誤りがあるまでの正答数(First Five)である。

結果はTotalで平均38.24 (SD=3.2), First-Fiveで29.71 (SD=10.14)であった。各得点に対する標準偏差

値, 最頻度値, 歪度が算出された。テスト-再テスト間での信頼性はFirst-Fiveで $r=0.71$, Totalで $r=0.90$ で有意差が認められた。FGPテストの偶数項目のみを試行した場合と、奇数項目のみを試行した場合の比較(Split Half)も行っており、相関係数は0.70, 再テストでは0.87で相関が認められた。その他, 社会的経済的指数と年齢との間にも相関がみられた。

以上より, FGPテストは成人に対するテストとして信頼性が認められ, 用いることができると結論している。しかしながら, テスト結果の解釈に際して, 年齢および教育レベルなどを考慮する必要性にも言及している。

Petersen P, Goar D, et al: Performance of Female Adults on the Southern California Visual Figure-Ground Perception Test. AJOT 39(8): 525-530, 1985

(札幌医科大学衛生短期大学部 作業療法士

小野 昭男)

手の器用さを評価する the Box and Block Test の成人の標準値

この研究は、著者らの行っている“手の力と器用さの研究”の一環であり、1957年にP.H. BuehlerとE. Fuchsが発表したテスト形式の、成人の標準値をまとめたものである。

テスト; 2.5 cm 角のブロックを2つに仕切られた箱(53.7 cm × 25.4 cm)の一方からもう一方へ、決められた手順で、60秒間にできるだけ多く移す。

対象; Milwaukee地域の20~94歳の628人(男310人, 女318人), 社会経済面や職業面で大きな広がりを持つ, 正常成人。これを, 75歳以上を除いて, 5歳ごとに分けた全12の年齢別グループと, 性別と, 利手で分類する。

結果; 男女別のデータを度数多角形にすると正規曲線を描くが, 一般に, 女性の方が男性よりもわずかにスコアが良い。左右別では, 右利きの被験者のスコアは右手が良く, 左利きの場合は, 一定していなかった。年齢的には, 加齢にしたがって, スコアの低下がみられた。こ

のため, テスト結果は, 男女別々に, 12の年齢ごと, 左右別にまとめられている。

このテストの標準値のデータは, 他の手の器用さを評価するテスト(the Minnesota Rate of Manipulation Test-Placing, the General Aptitude Test Battery, part 10, 等)とも一貫している。the Box and Block Testは, 簡単で, 低価格で, おおまかな手の機能のためのテストとして効果的である。著者らは, 手の器用さに障害のある疑いのある人の評価にこのテストを勧めている。また, このテストは治療プログラムの効果判定にも使うことができる。

Mathiowetz V, Volland G, et al: Adult Norms for the Box and Block Test of Manual Dexterity. AJOT 39(6): 386-391, 1985

(自治医科大学附属病院 作業療法士

中田 厚子)